

論説

十七世紀初頭のチベットの抗争と青海モンゴル

山口 瑞鳳

ダライラマ四世の選考事情

一五八六年に帰化城を訪れたダライラマ三世は、翌年トゥメト・右翼に到り、ドゥレン Du reng (Seng ge) 王の葬儀を行った (D3-104a<sup>1</sup>)。その後、カラチン王の招きを受けて元朝の上都の跡を訪ね (D3-105a-6+b-1)、『その地で翌八八年正月末から病み、三月二十六日に没した (D3-106b-4=107a-2)』<sup>(1)</sup>。三世に同行していた副寺職

十七世紀初頭のチベットの抗争と青海モンゴル 山口

phyag mdzod 国師ペンテン・ギャンツォ Gu shri dPal Idan rgya mtsho の同意で、十月二十五日に遺体は荼毘に附せられ、遺骨は八九年早々に中央チベットに届けられた。九二年二月デーブン寺に靈塔の善住法要が行われた (D3-107b-2=108a-2)。

既にダライラマ四世の選考が始まっていた。ダライラマ三世は、ダライラマ二世時代の黄帽派とカルマ二派との対立の解消に生涯努めた。一五六九年ツァン地方訪問の帰途、ナカルツェ sNa dkar tse のデイタン De'i thang (三世はカルマ二派の法主と会見して、従前の關係を画的に改善した (D3-82a-6=b-4) (ZM5-56a-2=3, ZN9-43a-1=2)。時に前述の副寺職とその後任の副寺職クンドゥン・チューザン・ティンレー sku mdun Chos bzang 'phrin las の二人が近侍を勤め、後々も共に融和主義者として活躍した。そのような事情から、三世が青海に出発する際、カルマ派は見送りの使者を立て (ZM5-61b-7, ZN9-88a-6)、三世もモンゴルから一二度カルマ派両法主に便りを寄せていた (ZM5-63a-7=b-1, ZN9-89a-6, 92a-3)。帰った空気を反映して、デイグン御前チユーギェル・ペンツォク 'Bri gung zhabs drung Chos rgyal phun tshogs の第三子、クンチョク・リンチェン御前 zhabs drung dKon mchog rin chen がダライラマ四世の候補に挙げられ、選考責任者の副寺職国師ペンテン・ギャンツォ自身がデイグンに確認試験に赴いた。しかし、その時決定は宣言されなかった。その中に事情が一転して、ネーチュンの護法神 gNas chung chos skyong にまつて、新活仏はモンゴルに生まれると予言され、他の神託 (bsam yas, La mo) もつれに倣った (D4-4a-2=6)。

『ダライラマ三世伝』によれば、副寺職は一五九〇年にはなおツォンカ bTsong kha にいた (D3-107b-6)。チ

ベツト本土に一旦帰国した後モンゴリアに向かい、九二年に帰化城で初めて四世と対面した。(D4-16a-2=b-2)。従って、彼は九〇年から九二年の間にデイグン寺を訪問したことになる。

ところが、モンゴルにいた代表団の責任者、侍従長ツルタイム・ギャンツォ *gsol dpon Tshul khriims rgya mtsho* らは、既にネーチュン神託以前の八九年の十月十五日付けの報告で、ドウレン王の第五子セチェン・チュクル *Se chen chos khur*<sup>(2)</sup> の家を訪れたが、その子がダライラマ四世に相違ないと言い、この地ではその話しが知れ渡っているから早く正式に認定せよと求めて来た。そこで、デイグンに活仏を指定する話は立ち消えになり、正式使節団のモンゴリア派遣が相談された (D4-4a-6=5b-1)。

この事実は次のように理解される。副寺職を始めとするデーブン寺兜率宮の穩健派は、八八年にデイグン御前の第二子ガルワン *sGar dbang Chos kyi dbang phyug* (1584-1630) がカルマ紅帽派の六世法主になったのを意識して、その弟をダライラマ四世に選ぶことによって、三世の意思を生かした宥和政策を取ろうとした。しかし、強硬派は、ツァンの政治権力と結びついているカルマ派を、トゥメトの軍事力を背景にすれば威圧できると期待して、アルタン汗の曾孫を四世に選んだのである。八九年一月生まれのものを、その同じ年の十月に既に実質的に承認しているから、その決定が四世の能力と関わりなく決められた政治的なものであったことが判る。

九一年トゥメト王が四世を訪ねてきた (D4-12b-2)。九二年四世は帰化城に赴くが (D4-13b-3=5)、八月十五日に出発する際、チャカル王<sup>(3)</sup> から派遣された使者の一隊とも会った (D4-14a-6=b-1)。白塔に着いた時、出自は不明であるが、クンチュクタイジ *dkon mchog thai ji*<sup>(4)</sup> に迎えられた (D4-14b-2)。チベット国内からも関係の

代表者が全て集まって四世の正式承認が完了し、ユンテン・ギャンツォ Yon tan rgya mtsho の命名も行われた。しかし、一六〇三年までの十一年間四世はこの帰化城から動けなかった (D4-17a-1-4)。

『四世伝』では、モンゴル王公の妨害に触れた後、国師副寺職の努力で内外の障害に巧みに対処したが、チベット国内の事情が整わず、延び延びになったと言う (D4-20a-3-b-2)。兜率宮強硬派が、三代目順義王に既にアルタン汗の昔日の威光がないことを知らずにこの選択を進めたため、スムメルタイシ Sum mer thaj'i の子がチベットの有力寺院の活仏になることに何かと不都合があったらしい。この間にオルドスの一族が全く名を出していないことにも注意しなければならない。

一六〇三年新活仏一行は、逃げ出すようにして帰化城を離れ、何処にも寄らず、長城の外側に沿って道を辿り、青海に到った。そこにはドロロン・トゥメトのコロチェ Kho lo che がいた<sup>(5)</sup>。四世は逗留を請われたが、二・三か月して出発した。コロチェはキャレン・コレン湖 mtsho sKya reng, sNgo reng まで見送った (D4-20b-2-21a-c)。しかし、この辺に拠っていた青海オールドスとの接触は全くなく、八月に中央チベット北部のラベン Rva sgreng に着いた (D4-21a-5-6)。

そこまでガンデン前座首サンギェー・リンチェン Sangs rgyas rin chen (1540-1612) が迎えに出た (D4-21b-3)。更に、ペンユル Phan yul まで、時のガンデン座首ゲンドゥン・ギェンツェン dGe 'dun rgyal mtshan (1532-1607) が迎え、四世はガンデン大僧院に参拝した (D4-22b-2-5)。ついで、ラッサの大招寺に入り、キシユ管領の私邸ガンデン・カンサル dGa' Idan khang gsar に寛いだ (D4-23a-3-b-5)。

日時は明らかでないが、そこからデーブン寺兜率宮に迎えられ、俗人のまま四世として登位した。その後、大招寺でガンデン前座首を戒師として出家した (D4-25b-5, 27a-5b-1)。当時兜率宮には、強硬派ダウンツォ・デンパ drung 'tsho 'Dan pa もしくはテンパ・ツォチェ 'Dan pa 'tsho byed と呼ばれるものが我がもの顔に振る舞っていた。彼はガンデン前座首サンギェー・リンチェンを罵っていたので、前座首は四世の師になることを断り、時の座首も辞退してパンチェンラマ一世が推薦され (D4-31a-3<sup>6</sup>)、採用された (D4-31b-1=6)。このような環境の中で四世は一六〇四年のラッサの大祈願会の導師に立つことになった (D4-32a-3)。

#### 青海オルドスとカルマ派

モンゴルによる青海の攻略は、元来一五三二年オルドスの吉囊 (Noyandara Jimong 1506-1550/1542) (和田 p. 734) によって始まった (『明史』330 西番諸衛伝、嘉靖十一年、和田 p. 789)。ついでアルタン汗がオルドスのビンドウらと共に一五五九年に青海を攻略した (『明史』西番諸衛伝、嘉靖三十八年、和田 p. 790<sup>7</sup>)。また、『蒙古源流六』によると、オルドスのセチェン・コンタイジ (Khutukai Sechen Khong Taijii) が、一五六六年錫里木濟 (Shilim-ji) の三河交会地方に侵入した。この時三人の大ラマに接触して平和裡にこの地を制圧したと言う (和田 p. 790-791)。

青海で三つの河が合流し、仏教の盛んな地方と言え<sup>(8)</sup>ば、黄河、大夏河、洮河の合流する地域の南部にあるニヤロン gnYa' gong から東、シンクン Shing kun (臨洮) 方面になるであろう。その西寄りのグチュ河 dGu chu 沿

らのレプゴン Reb gong はセルモシヨン Ser mo ljongs と呼ばれた (DTG1-30a-1) が、錫里木濟はこれを写したものかも知れない。<sup>(9)</sup> 彼らと折衝した代表のニラマと、彼らが連れ去った三人について確認はとれないが、この後に彼らと深く関わるカルマ派九世法主の許に、一五七八年にボシャン・パクシ Bo shan paksi なるものが使者に遣わされていて (ZN6-88a-67) 、この名が、代表のニラマの中の大布爾薩喇嘛 (Borsa Lama) や、連れ去られた三人の中にある巴克実喇嘛 (Paksi Lama) を思わせる。<sup>(10)</sup>

同じ年ダライラマ三世がアルタン汗に招かれて、五月十五日に青海の南のチャプチャ Chab bya で会い、汗は三世のためにその地にテクチェン・チュンコルリン Theg chen chos 'khor gling' いわゆる「仰華寺」を建てた (D3-94b-1-96a-4)。<sup>(11)</sup> それに先立って、ダライラマの第一回の迎接使の一人にオルドスのカテン・バートル Kha than ba thur が (D3-93b-5) 第二回の迎える一人にはオルドスのセチェン・ホнтаイシ 'Ur bsduis rgyal rigs Se chen hong thai ji が (D3-94a-2) それぞれ立った。ここに、最初からオルドスと青海との関わりの深さが見られる。<sup>(12)</sup>

第二回目の使者たちが到った時、三世はアリク A rig のハンケ Hang nge にブンツォク・ナムギエーリン Phun tshog nman rgyal gling 僧院の建設を指図していた (D3-94a-2)。三月の中に彼はオルドスのエーペル・ノヨン As dpal noyon の宿營を訪れて説法し、その後第二回目の迎接使が到着してチャプチャに向かっている (D3-94a-4-6)。ハンケは『テプテル・ギヤンツォ』によると、タクカル・ベルズン Brag dkar spel rdzong' 民 国分省地図の非祖寺に近ら (DTG1-29a-4)。<sup>(13)</sup> 『黄瑠璃鏡史』は、三世建立のこの寺をエーペル・ノヨンの支配地

にあったものとしてゐる (VSM-271a-4-5) (DTG1-252a-5)。

仰華寺にいた三世は、同じ年の七六年半は頃になるであろうか、オルドスの王子ビンドゥウの建てた寺の善住法要に招かれ、プンツォク・シェンペンテ Phun tshogs gzhan phan sde と名づけた (D3-97b-3-4)。特に地名や遠近に言及がないのと時間的な余裕のないことから、この寺は青海の南を北上する黄河の西側にあったものと推測される。その後、この年度内に三世は争乱調停のため甘州方面に往復している (D3-97b-6-98b-2) からである。翌七九年オルドスのジュナン Ju nang 王が会いに来て、その後、アルタン汗が東帰している (D3-99a-1-6)。

青海のビンドゥウが、漢文史料では丙兔と書かれ、アルタン汗の第四子とされるが (和田 pp.711, 738-739, 806) チベット史料では、『蒙古源流六』で言うところを借りるなら、拜桑固爾狼台吉 Baisangghur Lang Taiji の長子、愛達必斯達延諾延 (Aidabis Dayan Noyan) になり、譯巴卓哩克圖諾延 (Aoba Joriktu Noyan) の「まり、エーペル・ノヨンの兄になっている (和田 pp.718-719)。この点も別に詳しく見た<sup>(13)</sup>。和田清博士の『東亜史研究』では、アルタン汗第四子の丙兔が建てたとは言いが、その寺を『俺答後志』によって、今日のトンテプ Tong sde 同徳あたりに見ている (和田 pp.794-795)。この種の位置比定は依用出来ないが、トンテプは黄河を挟み、ハンケとは遠くないので興味深く、さらに、上述のプンツォク・シェンペンテが思い合わせられる。

オルドスの王についても、『ダライラマ三世伝』などの伝えるところは、漢文史料の伝えるところと全く異なっている。これらは他にも述べたが、アルタン汗東帰後カム地方の教化に赴いたダライラマ三世が、カムから戻った後、八五年に青海を離れてモンゴルの地に向かった。途中オルドスの「ジュナン王の招きを受けて——王主

従を喜金剛の曼陀羅において灌頂し、建立された寺と僧院の善住法要を営んだ。——王は自らの御子に王権を渡し、輪廻の富の一切を捨てて出家した」(D3-103b-2r)とされている。

時代から言えば、西哨把都児黄台吉(≡布延巴圖爾鴻台吉 Buyan Baghatur Kong Taiji)が長子のト失兔台吉(≡博碩克圖濟農 Bushuktu jinong)(和田 p.717)に讓位、出家したことになる。位を継いだボシヨクト・ジノンについては、『蒙古源流八』では、一五九六年に「行兵西圖伯特地方、招服古嚕索納木札勒之沙喇衛郭爾、修明經教之事、未易言罄」(和田 pp.736, 808)と言つ。これに相應するかもしれない事実をチベット文献に探すと、Guru bSod nams rgyal は不明であるが、カルマ派の九世法王の伝記に

(一五九六年)モンゴル人の国 Sog yul からアペル A dpal 王の勅使が着いて便りと贈物が献上され、王の許にお越し頂きたいとの願いが寄せられた。また、同様に、モンゴルのベルドウル Bal dur 王の勅使も着いて、便りを銀の印璽と共に献上した (ZN9-111b-3=4)。

とある。アペルは既に見たエーペル・ノヨンである。彼は八八年にビンドウと共にカルマ派九世法主に贈物と共に使を遣わしている (ZN9-98b-1=2)。グライラマ三世の没年のことになる。ベルドウルは、印璽を贈っているから宗家の王であり、このボシヨクト・ジノンに相当するであろう。<sup>(14)</sup>

ビンドウ、アペルとグライラマ三世の関わりは既に述べたが、三世がカム地方に巡錫に出発する際、エーペル・ノヨンに見送られ (D3-99b-5)、カムから青海に戻った八二年十一月三世はエーペル・ノヨンの風邪を見舞つて奇跡を示した (D3-102a-4=5) と言われている。それほど浅からぬ縁があった。しかし、アペル王は、二年後



の八四年、三世が青海を発った年に既にカルマ派法主に使いを出し、贈物を届けているのである。

カルマ派九世の出自を知ると、彼らの関係に恐らくある程度の納得がいくであろう。九世はワンチュク・ドルジェ dBang phyug rdo rje (1556-1603) と呼ばれ、カムの北東部テオ Tre bo の下手 smad のタクサン sTag bzang に生まれた (ZN9-74a-1=2)。この地は、青海オルドスの王たちが拠った土地の南隣、ゴロク nGo log 領域の南側に接している。『テプテル・ギヤンツォ』によると、ゴロク一族からは、続く時代に紅帽派七世法主イエシェー・ニンポ Ye shes rnyug po (1631-1694) が現れる他、カルマ・ユンジン Karma yongs 'dzin がこのカルマ派九世法主の弟子になる (DTGI-76a-2)。六二年に、九世は彼らによってゴロク領内のマルトツ sMar stod に招かれていた (ZN9-77a-7)。従って、青海オルドスにも身近で知られていたのである。

萬曆十五・六 (1587/88) 年の境頃、青海の丙兔、河套の切盡黃台吉が相次いで死んだと漢文史料によって『東亜史研究』は言う (和田 p.681) が、先に見たようにヒンドウは八八年にカルマ派九世法主に使者を送っている。しかし、その後彼の名は見えない。十七世紀に入ると、トウメトとユンシエフ以外でカルマ派に使者を送ったのはカデン Kha dan 王のみになる。

このカデン王は、ダライラマ三世をユンシエフのバルク・タイシ Yong sha bu'i Bar khu tha'i ji と共に迎えに赴いたカデン・バートル (D3-93b-5) と思われる。『蒙古源流』によると、このカデン・バートルはオルドスの人となっている<sup>(15)</sup>。従って、『蒙古源流六』によって和田博士が掲げた系図で言うところ、衛達爾瑪諾木歡諾延 Oidarma Nonghan Noyan の子楚瞻克青田圖爾 Chirtüge Ching Baghatur によっての長子哈坦田圖爾 Khatan Bagatur

が(和田 pp. 720, 742-3) これに相当するであろう。彼も、ユンシエブのバルク・タイジ、すなわち、セチェン・ダイチン・タイジも、共にグライラマ三世を迎えた関係者の中では若い世代に属していた。

一六〇二年に、カルマ派九世法主は、カテン(カテン) 王の重なる招きを受けて、ギャワの古僧院 Gya dai dgon rnying まで双方から出かけて会うことになり、<sup>19)</sup> 出発した(ZN9-117b-6-118a-3)。グライラマ四世のチベツトに入る一年前になる。

順次に行つた果て、スムド Sum ndo まで、カテン王は王妃、大臣、家臣、ホルトゥ Hor stod<sup>19)</sup>の代表的會主ら有力者ともども騎馬千人近くと共に迎えに立ち、莫大な初対面の贈物を呈し、ドンブ Brong bu の古僧院の傍らに宿營を張り、もてなし、贈物を重ねた上で、殺生を止めることと八十ほどの牢から囚人を解放することを約束して法主の加持を受けた。法主は同時に同行のモンゴル人、ホルの會主からも贈物を受け、加持を与えた『カルマ派九世法主伝』は言フ(ZN9-117b-6-118a-7)。

一六〇五年、この年中央チベツトで何が起つたかは次に見るが、グライラマ四世の候補で終つた弟を持つ、紅帽派六世、デイグン派出身の法主ガルワンもこのカテン王に招かれ、王自らナムツォ湖 gNam mtsho の傍らまで迎えに来た。六世法主はグンシエル Brang zhal の草原で王に加持を与え、莫大な馬、財物、羊、塩の贈物を受けた(ZN6-132a-2 = 3)。『紅帽派六世法主伝』の記述順から見てその年の半ばか以降のことであつたと思われる。これらは、会見の規模、時期から見て、明らかにグライラマ四世の權威を無視して行われている。

## デーブン寺兜率宮とカルマ紅帽派對立の再燃

紅帽派とカデン王の結びつきが確立するより二年先の一六〇三年に、四世の出家剃髪に対して紅帽派六世法主ガルワンが寄せた祝辞から事件が起こった。この祝辞が悪意を寓しているとして、四世側近の強硬派が露骨な返書を認めたのである (D4-39b-1=31a-3)。この後紅帽派法主が大招寺の釈迦像に捧げる詩を、奉呈した聖カタ *snyan dar* に書いた。その内容が、かねて黄帽派の不徳を非難しているとの噂に相応しているとして、兜率宮の強硬派が憎悪を募らせ、所屬は不明であるが、モンゴル人を唆して、紅帽派の牲畜を奪わせた。これに対して一六〇五年、当時の名目上のチベット政府であったバクモドウ氏とツァン軍が、兜率宮と共謀していたキシユ管領の軍を破って甚大な損害を与えた (D4-41a-4=b-4) (PSJ-106a-2=3)。

『四世伝』によると、翌年キシユ管領とデーブン寺兜率宮との間に間隙が生じて、結局国師副寺職が引退する形で調停が成立した。この争いの直接の原因はモンゴルのカテン王が作り出したと述べられている (D4-37a-6=b)。具体的な関わりは判らないが、キシユ管領のその後の動きから推測するなら、ドゥンツォ・テンパで代表される兜率宮の強硬派と彼とが、カテン王を利用出来ないで、時のチベット政府の制裁に遇ったため、兜率宮穩健派が責めを負わせられ、穩健派のクンドゥン・リンポチュを残すために国師副寺職が自らの身を引いたものと考えられる。しかし、この後カテン王の消息はチベット語文献から消える。<sup>(18)</sup>

翌〇七年六月ダライラマ四世は、パンチェンラマ一世に招かれてツァン地方のタシルンポ寺 *bKra shis lhun*

po に赴いた (D4-37b-3-38a-6)。その折ツァンの管領カルマ・テンスン・ワンポ Karma bstan srung dbang po (2-1611) からは冷遇されたが、ヤルギャブ氏出身の、後継の管領プンツォク・ナムギェル Phun tshogs nam rgyal (1586-1620) の母から丁重な供養を受けた。四世は帰途にカルマ派との関係改善のためコンカル Gong ri dkar po で紅帽派法主と会見することを願ったが、兜率宮強硬派の側近が会谈阻止のためにデーブン寺に早々に帰ってしまう (D4-40a-6 = b-3) と言う一幕があった。その後兜率宮の中では穩健派が監視されて身動きも取れなくなったと『四世伝』は言う (D4-40b-6-41a-2)。

この年青海からコロチエの長子大ラツウン IHa btsun とユンシエブのセチエン・ダイチン・タイジとに率いられた相当数の軍がラツサに着いた (D4-41a-3=4)。前のキシユ管領ユルギェル・ノルブ g-Yul rgyal nor bu やクンドウン・リンポチエの和平志向に反して、時のキシユ管領ソナム・ナムギェル bSod nams nam rgyal やテンパ・ツォチエらが多数派となり、モンゴル軍を利用して騒乱を起こすことを図り、実行に移した。そのためツァン軍がキシユの中心を襲い、領地城寨を占領した。他方、青海のモンゴル軍がこの世の終わりのように暴れ回り、老僧らの呪詛によってモンゴル軍も撤退したが、キシユ管領と僧院の関係は悪くなった (D4-41b-6-42a-3) と言う。

『四世伝』中には、この争乱についての日付はないが、トゥメト軍の到着に続けて書かれている。『パンチエンラマ一世伝』では、〇七年の十月二十五日に北方の客人(モンゴル人)らがガンデン寺に到着し、冬の安居にタシルンポ寺に來たが、訳もなくトラブルを引き起こすのに悩まされ、翌〇八年三月に祈禱法要を営んだ (P1-45a

-5b-3) とある。トゥッチ博士は、サキヤバのソナム・ワンポ bSod nams dbang po (1559-1621) の伝記によつて〇七年にプンツォク・ナムギェルはウーに到り、キシュ管領に唆されたモンゴル軍を撃退したと言ふ (TPS, 1, p.54; p.256, n.114)。ただ、『バクサム・ジュンサン』だけ、一六一〇年にカルマ・プンツォク・ナムギェルと、當時五歳の幼児でしかない筈のカルマ・テンキョン・ワンポ Karma bStan skyong dbang po (1606-1643) の名も加えて、その子との軍がウー地方を襲つたが、モンゴル軍を恐れて一旦撤退した (PSJ-106a-2=3) と言ふ。<sup>(22)</sup> この年次は信頼できないので捨てて、同時代史料の言ふところに従い、青海オールドスの名を見なくなった後の〇七—〇八年の事件とすべきであろう。

『四世伝』によると、この間に様々な呪咀が行われたと言ふ表現があり、どのような工作の経緯があつたか明らかではないが、ツァンの管領とその母方のヤルギャブ氏 Yar rgyab pa の協調態勢が崩れ (D4-43b-4)、一一年ツァン軍がヤルギャブを襲撃した。この年の前後にも北方からの来訪者が多かつた (D4-44b-1=2) と特筆されている。しかし、北方から来たモンゴル人が争乱を起こしたと言ふ記述はない。時にツァンの管領プンツォク・ナムギェルがラツサに到り、関係修復のため、ダライラマ四世から戒を受けたいと申し入れたが、拒否された (D4-44b-5=45a-1)。その後か先かは明らかでないが、『バクサム・ジュンサン』では、十二年にツァンの管領が、ラトウのチャン La stod Byang とギェルカルツェ rGyal mkhar tse を制圧してツァン全土を掌握し、ウーを攻撃して、ネウゾン sNe'u rdzong などを手中に収めた (PSJ-106a-3=4) と記す。<sup>(23)</sup>

この間の一年に、パンチェンラマ一世は中央チベット東西の争いの調停を期待されていた (P1-49b-3=4)

が、果たせぬまま一二年八月ブータンに招かれ、帰国した時、両地域の争いは極限に達していた (P1-51b-6-52b-6) と言う。四世はこの当時から、デーブン寺で具足戒を受ける一六一四年まで、かなり長期に渡って南のギェルに避難していた (D4-46a-4-b-2) らしい。

### 紅帽派法主の青海トゥメト、ユンシエブ訪問

時は遡るが、一六一〇年八月紅帽派六世法主は、カムの本山オクミン・カルマ Og min karma に赴き、その地でモンゴルからの招待使を迎えた。その後場所は明らかではないが、ラプトウ Lab stod で再び使者を迎え、ジヤタン Ja thang に来たトゥメト王、つまり、コロチに会った。一緒にニダ・スムド Nya zla sum ndo にいる時、ユンシエブのチェチェン・ダイチン (セチヨン・ダイチン) から贈物を受けた。十二月十四日六世はチャクモ・レンボツェ Cags mo lhun po rse でカルマ派の新活仏、十世法主チュイン・ドルジェ Chos dbyings rdo rje (1604-1674) と始めて会った (ZM6-135a-2-b-1)。この地は、オールドスの青海拠点の直ぐ南のゴロクの領域にある (DTG1-276a-5)。

この後、つまり、一六一一年になると思われるが、紅帽派法主はトゥメト・コロジの招きを受けて出発し、カルダク・ショタン dkar brag zho thang に着いた時、トゥメト、ユンシエブの迎えのものに会った。同行するはずのカルマ派十世法主がボン教徒に拘束されたので、他の従者とのみ同行した。九世の故郷タクサン stag bzang (ZM6-136 b-5)<sup>(24)</sup> なぎを通り、黄河河畔を経てラトゥクダク Ra thug brag に着くと、チェチェン・ダイチ

ンの迎への騎馬が現れた (ZM6-135b-1-136a-1)。

翌日王主従八百ほどが迎えに到り、青海湖南岸地区のチャガル・ブラク Cha gar bu lag<sup>(25)</sup> 王から贈物を受けた。ウネチヨル dBu nas cor に着くと、コロシの迎えが到った。ダウデラムダ Dva'u de la mda' 一カ月を過<sup>(26)</sup>じ、青海湖を観た。時にコロシ王から馬千頭などの莫大な贈物があった。その後アチエンタン A chen thang に赴き、また、チエチエン・ダイチン王に招かれ、贈物を受けた。順次進み、シエルコク・ドサムカ Shel khog rdo zam kha に到り、ホルツァン Hor tshang と受施寺院 bla dgon の争いを調停した (ZM6-136a-1-5)。このホルツァンはカギヤ六群 Kha gya tsho drug に属し、漢文史料でコロチエ火落赤の拠点とされた捏工川 gNya' gong に水源を持つ川が、大夏河、つまり、サンチュ gSang chu に合流する地点周辺に拠っていた (DTG3-41a-5-b-3)。この後六世法主はシエルコク・イェルタン Shel khog g-yer thang' アチエンタンへと戻っている (ZM6-136a-5-6)。この間に青海オールドスとの接触は伝えられていない。

このような事情から、一六一〇年後半から一二年にかけて、紅帽派法主と結ばれていたツァン王は、青海のトウメトとユンシエブから積極的な攻撃に曝される危険は極めて少なかったと思われる。事実一一年に訪れたモンゴル人たちも動いた様子がない。その間に態勢を整えたツァン王は、ヤルギャブ氏を制圧し、『バクサム・ジュンサン』の言うようにツァン地方も掌握して、パンチェンラマ一世がブータンに出向いた一二年八月以後にキシュ管領とデーブン寺兜率宮の急進派連合を窮地に追い込んだのであろう。グライラマ四世の生存中トウメトが動かなかった背景には、彼の出自の威力とは別に、いま一つ紅帽派六世法主の活躍があったことも知っておかねばな

らない。

チュンコル・ギェルから帰ったダライラマ四世は、一六一四年十二月パンチェンラマ一世らから具足戒を受けた(D4-46a-6-b-2)。この年小ラツウン IHa btsun chung ba<sup>(26)</sup>などのモンゴル人がタシルンポで沙弥戒や具足戒などを受けた(Pl-56a-1)。翌年になると、前年ラツサを訪れた(D4-48b-3)千人以上のモンゴル人もタシルンポで戒を受け、別にコロチェの長子、老ラツウン、別名、グル・フンタイジ Guru hung tai ji<sup>(27)</sup>ら百人ばかりは、パンチェンラマ一世からラデンで戒が授けられた(Pl-57a-2=3)。しかし、ツァン全土を抑えたシンシヤク氏と事を構えた形跡は全くない。

当時紅帽派六世法主は麗江方面において中央チベットを留守にしていた(ZM6-137a-5-b-7, 138a-4=136a-2)。コロチェの二子は、ダライラマ四世からではなく、パンチェンラマ一世から戒を受けた。立場としては、必ずしもデーブン寺兜率宮の強硬派などと結びついていなかったことが判る。一六年末ダライラマ四世は没した(D4-50b-2=3)。「四世伝」では、コロチェの二子が軍を率いて幾度も現れ、ツァン軍に対して事を構えそうになると、生前の四世は特に使者を使わして止めさせたが、立派な貢献であった(D4-50a-1=3)と言う。

先の副寺職クンドウン・リンポチェの没した一六一三年以来ソナム・ラプテン bSod nams rab brtan (1595-1657)<sup>(27)</sup> (D4-46a-5=6)が、副寺職に就いていたらしいが、一六年当時招かれて西チベットのかりに赴こうとしていたパンチェンラマ一世に次のように懇願している。

今年トウメトのこれらタイジの為さり方、キシユの(管領)御前と、大僧院(セラ、デーブン)の責任者い



ずれもの仰せ様は、ツアンの摂政に対して表向きに対応が本音の口上と変わらなくなっています。こうしたことによれば、内乱が起きる可能性が免れないと思われれます。(中略)思うに任せぬことで如何に運ぶか予測出来ません。従いまして、今年は何処にもお出かけなさらないでお留まり頂くわけにいかないでしょうかなどとお尋ね申し上げた (D4-50a-4-6)。

この時パンチェンラマ一世は、四世がいらっしやるから大丈夫だと答えた。キシユ管領がラツウン兄弟らに働きかけていたことが判る。四世が没すると、パンチェンラマはグゲ旅行を延期し、翌年のラツサの大祈願会を主宰し、請われてセラ、デーブン二大寺の貫首を兼任し、秋には四世の葬儀を行った (D4-50b-2-51a-2) (Pl-58a-3-5, 50b-3-60a-2)。その後、翌一六一八年四月から一月にかけてグゲ地方に巡錫した (Pl-63b-4-65a-1)。

この留守中、キシユ管領の画策が成功してトウメトのラツウン兄弟とユンシエブ・セチェン・ダイチンの軍勢が動き、ツアンの摂政の動員したチベット軍と争い、結局、モンゴル軍が一旦敗れた (DTGI-36a-7-37a-3) が、二年後に再び来襲して、ラツサのキャンタンガンで勝利を収め、パンチェンラマ一世らによる仲裁によってキシユ管領と黄帽派強硬派が復権した (Pl-66a-5-b-4) (D5-26b-2-6)。このようにしてグライマ四世を選んだ時の意図がはじめて実を結んだ。このことは、青海トウメトの終焉と共に別に見た<sup>28)</sup>とおりである。

## 略号表

- 江國 江國眞美「青海モンゴル史の一考察」『東洋學報』六七—三、四 pp.113-145)
- 和田 和田清『東亜史研究(蒙古篇)』東洋文庫 1959年
- D3 Ngag dbang blo bzang rgya mtsho : *rje btsun thams cad mkhyen pa bsod nams rgya mtsho i wam thar dngos grub rgya mtsho i shing rta.* 1646, Ed. 'Bras spungs, 109 fols.
- D4 Ngag dbang blo bzang rgya mtsho : *'jig rten dbang phyugs thams cad mkhyen pa Yon tan rgya mtsho i wam par thar pa nor bu i 'phreng ba.* 1652, Ed. 'Bras spungs, 52 fols.
- DTGI Brag dgon zhabs drung dKon mchog bstan pa rab rgyas : *Yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji thar dar ba i tshul gsal bar bryod pa deb ther rgya mtsho.* 1869, Ed. bKra shis dkyil, 421 fols.
- DTG3 Brag dgon zhabs drung dKon mchog bstan pa rab rgyas : *Deb ther rgya mtsho las/Kha gya tsho dng nas rgyal mo tsha ba rong bar gyi dgon sgrub sde phal cher ba i dkar chags tho tsam bkod pa.* 1869, Ed. bKra shis dkyil. 272 fols.
- KGP dPa' bo gtsug lag 'phreng ba : *Chos byung mkhas pa i dga' ston,* Vol. Pa, 1564, Ed. IHo brag gNas, 253 fols.
- NBM E. Sperling : "Notes on references to 'Bri-gung-pa——Mongol contact in the late sixteenth and

- early seventeenth centuries” (*Tibetan Studies*, Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Narita 1989. Naritasan Shinshoji 1992) pp.741-750.
- P1 Paṅ chen Blo bzang chos kyi rgyal mtshan : *Chos smra ba'i dge slong Blo bzang chos kyi rgyal mtshan gyi spyod tshul gsal bar ston pa nor bu'i phreng ba*.1660, Ed. bKra shis lhun po, 225 fols.
- PSJ Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor : 'Phags yul rgya nag chen po bod dang sog yul du dam pa'i chos byung tshul dpag bsam ijon bzang, 1748,Ed.(repr. Satapitaka S. Vol. 214), 317 fols.
- TPS G. Tucci : *Tibetan Painted Scrolls*, 1949 Roma, 3vols.
- VSM Sanga rgyas rgya mtsho : *dPal mnyam med ri bo dga' ldan pa'i bstan pa zhva ser cod pan 'chang ba'i ring lugs chos thams cad kyi rtsa ba gsal bar byed pa bai dar ser po'i me long*. 1698, Ed. Zhol, 419 fols.
- ZG Ngag dbang blo bzang rgya mtsho : *Gangs can yul gyi sa la spyod pa'i mtho ris kyi rgyal blon gtsa bor brjod pa'i deb ther /rdzogs ldan gzhon nu'i dga' ston dpyid kyi rgyal mo'i glu dbyangs*. 1643, Ed. Zhol, 113 fols.
- ZMS 'Be lo karma Tshe dbang kun khyab : Zhva dmar cod pan 'dzin pa lnga pa (sGrub brgyud karma kam tslang brgyud pa rin po che'i man par thar pa rab 'byams nor bu zla ba chu shel gyi phreng ba zhes bya ba'i pu sta ka dpyi ma. Vol. Na, 1775, Ed. dPal spungs, f. 33a-7=f. 71a-6)

ZM6 Be lo karma Tshe dbang kun khyab : Gar dbang drug pa dpal ldan chos kyi dbang phyug rdo rje

dga' ba don kun yongs su grub pa phyogs las man par rgyal ba (*Ibid.*, f. 128a—2=f. 149a—6)

ZN9 Be lo karma Tshe dbang kun khyab : dPal karma pa chen po'i na rim dgu pa rje btsun dbang

phyugs rdo rje (*Ibid.* f. 73b—6=f. 121b—5)

註

- (1) 佐藤長『中世チベット史研究』(1986' 同朋社) pp. 346, 347では「フントで客死した」として『三世伝』f. 107aを指摘しているが、そのような場所の指定はなし。上都訪問とカラチンでの教化活動の後、翌年の記述になり、明の神宗の招待に触れ、三月病に倒れ (D3-105b-1-5) たと述べ、遺偈を紹介した後、二十六日に没した (D3-107a-2) と言う。遺偈には「大集団カラチン国の信仰厚き人々を伴う施主たる弟子と共に」(D3-106b-5) とある。これらについては『仏教史II』第II部「チベット」(玉城康四郎編 山川出版社 1983, pp. 187-288) pp. 270-272 に前後を含めて経緯を説明した。森川哲雄『アルタンホーン伝』の研究』(九州大学教養部 1987) pp.157-158, n. 337-2にも誤りの指摘がある。
- (2) D4—8a-1, 和田 pp.694-697, 703-704 参照。
- (3) 一五八六年チャカルから来たナモタイホンタイジ Na mo tai hong tai jiに三世は会っている (和田 pp. 565—566)。六年後に派遣された會主はブンツォク Phun tshogs と名づけられている。彼は以前に三世に会った人物とされている (D4-14b-1)。
- (4) 白塔について帰化城の東五十里に遺跡があるとされる。詳細は和田 pp.912-913, 919-921 参照。クンチョクタイジの比定は出来ないが、帰化城に近いから一六〇七年に没する (和田 pp.800-801) 時の順義王チョリクトの影響下にあったと思われる。
- (5) コロチュエ父子に関しては拙論「十七世紀初頭の青海トゥメト部」(『成田山仏教研究所紀要』一六, pp.1—25) に詳述した。
- (6) 著者タライラマ五世は、サンギェー・リンチェンが文殊菩薩の化身との噂も高かったことに対する中傷とし

て取り上げ、噂も否定し、いずれでもないとしている (D4-27b-1=6)。四世をトゥメト王家から選択することに関してガンテン座首らが取った対応に由来するのであろうが、詳細は未だ不明である。

(7) この事件はチャカル軍の侵入としてカムのテオ Tre bo でも恐れられていたと『カルマ派九世法主伝』(ZN9-75b-7) にも見えている。

(8) その著作集奥書によると、サキヤ・バクパ Sa skya Phags pa (1235-1280) が一二七一年から七四年頃までシンクンに滞在した。その地は『テプテル・ギャンツォ』(DTG3-169a-2) にするに Lin tho'u chin' 別名 Shin kun mkhar となっている。ただ、これが現在の臨洮縣かどうかは疑問である。『タライラマ三世伝』には、三世がツォンカにいた後、チャキュンタク Bya khyung brag に南下し、そこから東行してテンティック Dan tig' ヤンティック Yang tig' ソモカル mdzo mo mkhar に出て、一五八四年十萬弥勒像のチャムバ・ブムリン Byams pa 'bum gling に到り、ブムリンの詠った炳靈寺に由来するマゲルの地 Dzon' Ma sgal gyi sai' cha Ping le に宿營して、マゲルゴン Ma gal dgon に二日程泊まり、そこから筏に乗って大河を渡り、赴いたところがシンクンとなっている (D3-102a.6=b-5) からである。そこか

十七世紀初頭のチベットの抗争と青海モンゴル 山口

ら黄河を下ったにしても、現在の臨洮に行くには洮河をかなり遡らねばならないから、対岸に渡った後陸行したと言う意味になるのであろうか。佐藤長『中世チベット史研究』(同朋社 1986) は、ソモカルを解説して、p. 244. n. 23; p. 357. n. 23 の後者では、湟水南岸の弘化寺としているが、チベット文献の記述と全く合わない。また、今一つの解釈として民和県北岸享堂の北にある馬宮寺とするのも合わない。『タライラマ三世伝』では、黄河北岸の旅で炳靈寺に着く前に説明される。ただ、『テプテル・ギャンツォ』では、黄河の流れに沿って北から注ぐ河の順に北岸の事情を説明したとするが、ロキヤトゥン Lo kya tun の後、最後のマインシ Ma yin zi の直前にソモカルの説明を置いている (DTG1-271b-6=273a-3)。マインシは馬宮寺であろう。しかし、佐藤博士が言う馬宮寺と異なり、民国分省地図に馬宮集とある地が黄河の北行する地点のロキヤトゥン羅家屯近くにあり、『新輿図』20 では、丙靈寺の北に馬宮がある。その近くであることは、『テプテル・ギャンツォ』が炳靈寺をルキヤシ羅家寺やバイタシ白塔寺 (DTG1-268a-6) の直前に解説している (DTG1-266b-1-268a-1) ことからも見当がつくと思われる。なお、弘化寺については乙坂智子「明勅建弘化寺考」(『史峯』六、一九九一、pp. 31

—68) に優れた考察がある。

- (9) 『中世チベット史研究』(註8参照) p.349, n.1 では Silimji が西寧州を写したものと見ている。チベット語で西寧を Zi ling とは言うが、州を zi と呼ぶ例はな<sub>ら</sub>ず。
- (10) 『東亜史研究』p.790 『中世チベット史研究』(註9参照) pp.321-322 参照。
- (11) 『東亜史研究』pp.794-795 『中世チベット史研究』pp.329 参照。
- (12) 『中世チベット史研究』p.329 に具体的に地名を指定しているが、確かではな<sub>ら</sub>ず。
- (13) 拙論「十七世紀初頭の青海トゥメト部」(註5参照) p.17, p.23, n.29.
- (14) 印璽の贈主は宗家の王であることを意味する。チベットでは、オールドスをダヤン汗の右翼宗家と見ていた。従って、四世ダライラマの靈塔善住法要の施主に選ばれたトゥパタイジ (D4-51b-1) をダライラマ五世の名で、麗々しく副寺職ソナム・ラプテンがジュナン・タイスン・フンタイジ Ju nang ta'i sun hung ta'i ji に任命してある (D5-39b-5, 41a-6-b-2)。従って、このバートウルの異写字 Bal dur は、ボシヨクト・ジノンになるであろう。他に一五八三年にカルマ派両法主にラマ・トンナクチュ
- ブルフ兄弟 bla ma sTong nag chu 'phur pa spun を遣使したモンゴル王としてデルジン Dal jing の名がある (ZM5-67b-3, ZN9-91a-2-3)。daicing を写してあると思われるが、同定出来な<sub>ら</sub>ず。ユンシエブのセチェン・ダイチンの場合と区別されているので、オールドスのカテン・バートル (次註参照) の伯父クンテリン・ダイチン阿恰昆都楞岱青 Akiya Köndölen Daicing あたりであろうか。
- (15) 『アルタンハーン伝』(研究)p.143, n.199-4, NBM, p.749, n.35 参照。
- (16) カルマ派両法主と接触を繰り返しているものにホル・トゥウ Hor stod' ホル・メツ Hor smad' ホロル・バル Hor bar' むらび、ホル・アムドバ、Hor a mdo pa と呼ばれる遊牧民がいた。その酋主たちの名称はチベット風になっているが、一般のチベット名とは異なる。モンゴル Sog po と行動を共にすることもあるが、はっきり区別されている。これらに関しては、スパーリング E. Sperling 教授の近作に、ソクポ Sog po との区別を含めて、Hor dpon Karma dpal やディグン派のためにカテン王と戦った Karma g-Yul rgyal をめぐって新しい優れた考察が試みられている (NBM, pp.744-749)。詳細は今後の研究に待つしかない。

(17) *Zho dkar nag* と『バクサム・シュンサン』(PSJ-106a-1) は言へば、*Zhva dkar nag* の異字である。 *zhva dkar* は政府役人の夏の帽子であり、 *zhva nag* は役人の帽子であるところから政府の役人の指揮する軍を意味すると思われる。当時の政府の実権は、実質的にツァンのリンブン氏 *Rin spungs pa* の大臣シンシャク氏 *Zhing shag pa* カルマ・チンスン・ツンポの手にあったから、名目的な政府パクモドウパの軍と実質的な政府軍が連合して動いたことを言っているのであろう。

(18) スパーリング教授の研究によると、当時カデン・バートルの軍によるデイグン派掠奪があり、これにホル酋主カルマ・ユルギェル *Hor dpon Karma g-Yul rgyal* が反撃を加えた事実がある (NBM, p.749, n.35)。従って、唆されて紅帽派の牲畜を奪ったとされるのは、このことに由来する可能性が強い。これを利用して、キシユ管領らがカデン王の勢力を味方に取り込もうと図って、成功しなかったか。国師副寺職が引責辞職させられたのことが関わっているはなからうか。なお、スパーリング教授によると、カデン・バートルは1607/08に没したものとされている (*ibid.*)。

(19) グルフンタイジ *Gu ru hung tha'i ji* のことであり、テンキョン・ギャンツォ *bsTan skyong rgya mtsho* と

呼ばれる (P1-58a-4)。

(20) エンシエフのバルク・ダイチン・タイシ *Bar khu dai' ching tha'i ji* がセチェン・タイチン・タイシであることについては、拙論「十七世紀初頭の青海トゥメト部」(註5参照) pp. 2-4に詳述した(江国 pp.132-134参照)。

(21) キシユ管領であったカデン氏 *dGar Idan pa* ユルギェル・ノルブ *g-Yul rgyal nor bu* には、『ダライラマ五世の王統記』(ZG-105a-5) によると、三子があつた。管領ソナム・ナムギェル *bSod nams nam rgyal* とイン・ノルブ *Yid bzhin nor bu* とチェーシ *chos rje* になる。末子は管領チェーシ *sde pa chos rje* と呼ばれ、ダライラマ四世から剃髪を受け (D4-23b-5)、ハンチェンラマ一世の教えを仰ぎ (P1-57a-1)、本名はテンシン・ロザン・ギャンツォ *bsTan 'dzin blo bzang rgya mtsho* (1593-1638) (P1-57a-5) と言われ、青海に布教して、広く足跡を残した名僧である。

(22) ○八年に中央チベットにいたトゥメト軍が、なお二年滞留していたとは考えにくい。一〇年はヤルギャブの離反した年の誤伝でないかと思われるが、確かな史料がない。『バクサム・シュンサン』の記述は、例えば、『黄瑠璃鏡史』などから転載した西チベット・ツァフランの

文などを見ると、杜撰な書換えが多い。拙論「古代クゲ王国説の欺瞞」(『東方』8) p.15n.11参照。

- (23) Zahmad, *Sino-Tibetan Relation in the Seventh Century* (Roma 1970) pp.100-101には、キムム管令の立場について根拠もなく推測を述べ、カンデン寺座首ゲンドワン・ギェンツェン dGe 'dun rgyal mtshan との争いまで、その推測から具体的に述べられている。『バクサム・ジュンサン』のこの部分の記述がトゥツチ博士によって誤訳され、関係部分の関連一般が誤解されている (TPS1, pp.53b-54a) のに、ついで、訂正しながらそのまま利用している。『バクサム・ジュンサン』のこの部分は次のように訳される。「ヤルギャブの中枢を掌握したのち、一六二二年(ヤルトウ)チャンとギェルカルツェなどツァン全土を支配下に入れてツァン王と言われた。再び軍と共にウーに到り、ネウゾンなどを接取した後土地、城砦、屋敷の没収裁決をした」と。トゥツチ博士は、ヤルルンにあったバクモドゥバのネウドンツェ宮 sNe'u gdong rise とネルパ sNel pa が古くに拠ったキチユ河南岸のネウゾン sNe'u rdzong とを混同し、「土地、城砦」を Sa cha rdzong と言つて固有名詞に誤って読んだのである。

(24) カルマ・ドゥスム・ギェンパ Karma Dus gsum

mkyen pa (1110-1193) の生誕地も九世と同じテシユ Kre (Tre) shod であり (KGP-2a-1)、カルマ派と青海の結びつきは古。

(25) タライラマ五世が一六五二年に清朝訪問時に青海湖畔に出た後、リンチ Ring mo と呼ばれる青海湖の尾に当たるところにある谷間 Jongs に到る前にこの地を通つてゐる。

(26) 小ラツウンとは、コロチエの子、大ラツウン、ブル・フンタイジの弟ロサン・テンジン・ギャンツォ Bio bzang bstan 'dzin rgya mtsho (D5-26b-3) である。

(27) この生誕年は遅すぎる。彼には一六二〇年にタライラマ五世の前世認知試験に赴いた弟子ツァワ・カチユバ Tsha ba bkai'bcu pa (D5-27b-2=3, 28b-3=4) がいた。従つて、十二支一巡廻した一五八三年と見たほうがよい。なお、筆者は前作「タライラマ五世の統治権」(『東洋学報』73-3/4, 1992, pp.123-160) pp.130ff にあつて、彼をラギヤリワのソナム・ラプテン lHa bSod nams rab brtan と同一視した。しかし、東洋文庫所蔵の写本『施主・受施僧日月一雙の法律文』 mChod son nyi zla zung gi khrius yig (蔵外 No.444) ff.6b-7b にある、トッパルン・ギヤン stod lung rGya Je 氏の出身となつてゐる先代には、タライラマ三世ソナム・ギャンツォと四世上



ンテン・ギャンツォの二代のグシ *gu shi* を勤めた王ギヤレネ *sa yi tshangs pa rGya le nas* がいたとされている。この人物は国師副寺職ペンデン・ギャンツォであるかも知れない。

(28) 拙論「十七世紀初頭の青海トゥメト部」(註5参照)、pp. 6—9.